



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館蔵伝貞傳手記『大臼山御由来』翻刻と解題
Author(s)	宮本, 花恵
Citation	研究論集, 16, 23(右)-43(右)
Issue Date	2016-12-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.16.r23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63907
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_004_miyamoto.pdf



北海道大学附属図書館蔵伝貞傳手記

『大白山御由来』翻刻と解題

宮 本 花 恵

要 旨

本稿では、北海道大学附属図書館蔵伝貞傳手記『大白山御由来（慈覺大師御難行記）』（以下、『御由来』）を紹介する。

「大白山」とは、伊達市にある大白山道場院善光寺（以下、ウス善光寺）をさす。本資料は一般に知られている函館市中央図書館蔵『蝦夷地大白山善光寺縁起』とは別本である。一丁裏には、「明治四拾年六月二十日膽振國有珠町住／吉田家採訪史料／（享保年代津輕本覺寺住佛師貞傳記之）」とあって、明治四〇年（一九〇七）六月二〇日、吉田家蔵本を書写されたものとわかる。また、「享保年代津輕本覺寺住佛師貞傳記之」とあることから、これが享保期に津輕本覺寺の仏師貞傳が記したとする伝承があると了解される。本資料は、北海道庁寄託本であって、そもそも『北海道史』編纂のために収集された写本群である。そのため表紙にも「北海道史編纂掛」の印が押されている。

本資料を手記したとされる良船貞傳（一六九〇～一七三一）は、訪蓮社と号し、享保期に津輕で活躍し、昆布養殖の産業指導をしたとの伝説が残る僧侶である。さらに蝦夷地へ渡道し、ウス善光寺を中興したとされる伝承をもつ。蝦夷地への仏教伝播を考察するうえで、貞傳の信仰は勘案されるべき問題である。また本資料によつて、恐山と有珠山、津輕海峡を挟んだ広域な霊場の形成が示唆される。これは下北半島と蝦夷地の人的往来に因んだものと考えられる。貞傳と慈覺大師円仁を軸とした恐山・有珠山の親和性が注目され、また同時代的なウス善光寺の略縁起作成など、両地域における人的移動の増加が宗教的需要を生み出していったとも考えられる。

本稿では、北海道における貞傳信仰の実態を考察するうえで、『御由来』の翻刻が必要であると考え、報告するにいった。よつて『御由来』の翻刻及び詳細な解説を付して、貞傳信仰研究の基礎資料と位置付けたい。

キーワード・良船貞傳・近世浄土宗・ウス善光寺

【解題】

はじめに

北海道大学附属図書館蔵伝貞傳手記『大白山御由来（慈覺大師御難行記）』（請求記号、道写本一四〇。以下、『御由来』を紹介する。

「大白山」とは、伊達市にある大白山道場院善光寺（以下、ウス善光寺）をさす。本資料は一般に知られている函館市中央図書館蔵『蝦夷地大白山善光寺縁起』¹（以下、『善光寺縁起』）とは別本である。一丁裏には、「明治四拾年六月二十日膽振國有珠町住／吉田家採訪史料／（享保年代津軽本覺寺住佛師貞傳記之）」とあって、明治四〇年（二九〇七）六月二〇日、吉田家蔵本を書写されたものとわかる。また、「享保年代津軽本覺寺住佛師貞傳記之」とあることから、これが享保期に津軽本覺寺の仏師貞傳が記した伝承があると了解される。

また『御由来』は、『三心集抜書』・『歳々記大略』との合本であって、これらの表紙には「道写本一四〇」とある。『御由来』は、縦27・0 cm×横19・5 cm、紙数七丁である。これは北海道大学附属図書館編『日本北辺関係旧記目録』²の請求記号であって、本資料が北海道庁寄託本であるとわかる。これらは、そもそも『北海道史』編纂のために収集された写本群である。そのため表紙にも「北海道史編纂掛」の印が押されている。これを示すものとして、『御由来』に次のような朱書きがみられる。

犀川曰、享保十七壬子年の事、又曰、平山日記ニヨレハ貞傳ハ享保十六年四月十日死去セリ、サレハ十七年ニ来ルヘキ筈ナシ、

之ち前ノ壬子トスレハ寛文十二年ニ為レリ、可疑、壬子ヲ壬午ノ誤トスレハ元禄十五年ニテ彼ノ死去ニ先ツ廿九年ナリ³
「犀川」とは、北海道史編纂主任の河野常吉の雅号である。本資料が、河野によって考証された資料であるとわかる。河野は文久二年（二八六二）十一月二三日、長野県東筑摩郡島内村（現、松本市）に生まれた。生家は奈良井川沿いにあり、これが梓川と合流して犀川となる。雅号の由来である。

明治二七年（一八九四）八月、河野常吉は北海道庁にて植民状況調査に着手し、明治四〇年（一九〇七）九月『北海道拓殖の進歩』を上梓する。その後、「北海道拓殖史」の編纂が起草されるもいったん頓挫し、くだって大正二年（一九一三）、開道五〇年記念事業の一つとして『北海道史』編纂が決定するにいたる⁴。

本資料が明治四〇年六月二〇日に採集されたことをみると、「北海道開拓史」編纂の構想段階で書写されたものと推される。しかし河野の考証で疑義が生じたためか、『御由来』は『北海道史』に引用されず、資料の所在は目録にあるにも関わらず、従来本資料が注目されることはなかった。

本稿では、北海道における貞傳信仰の実態を考察するうえで、『御由来』の翻刻が必要であると考え、報告するにいたった。よって本稿では、詳細な解説及び翻刻を付して、貞傳信仰研究の基礎資料と位置付けたい。

一、河野常吉の貞傳渡道説

筆者は別稿において、従来いわれてきた須藤隆仙の宝洲渡道説を論拠⁹としての貞傳渡道は断定できないとした。しかしながら、戦前から貞傳渡道説はあつて、河野常吉の説もその一つである。

河野は『御由来』の成立が「壬子の年の秋九月十二日の子之刻」ごろと考えたようで、この年代を考証し、貞傳渡道の時期ではないかと仮定している。

さて貞傳は諱を良舩、訪蓮社と号し、享保期に津軽半島今別で活躍し、昆布養殖の産業指導をしたとの伝説が残る僧侶である。実際、『山形日記』によれば、貞傳の葬祭に近在のみならず南部・秋田・松前からの参詣者があつたという。貞傳は、元禄三年（一六九〇）、弘前藩領今別村（現、青森県東津軽郡今別町）新山新左衛門の家に生まれ、二歳の時に父母が出家にだすことを誓い、のちに本覚寺二世良心安貞の弟子となる。安貞は次いで弘前誓願寺住職となり、貞傳もこれに従い弘前で修行をしている。その後、僧侶資格を得るため、浄土宗名越派壇林寺院山崎専称寺（いわき市）で修学する。この時、本覚寺檀家の招請により享保三年（一七一八）、二九歳で本覚寺五世を継いでいる⁸。

星野和太郎『北海道寺院沿革誌』（二八九四）に、「其後享保年中津軽本覚寺住僧貞傳來リテ如來模像ヲ唐銅佛ニ鑄移安置セリ今日ノ本尊是ナリ」とあつて、明治中期には貞傳がウス善光寺に来て仏像を作り、安置したと解釈されていたとわかる。内田邦彦『津軽口碑

集』（二九二九）にも「此今別より松前までは海を越えて十里もあるべきに、此上人はいつも松前に往つて來るとしては草履ばきにて出で往けり」¹⁰とあつて、貞傳の渡道は一般に広く流布された伝承であることがうかがえる。そのため現在も、ウス善光寺の寺伝には、貞傳が中興したと記されている。従来、貞傳渡道説は、貞傳作ウス善光寺秘仏本尊阿弥陀如来像の背面に「貞傳作」とあることに依拠する¹¹。

ところで、河野が考証しているように、貞傳の没年は享保一六年（一七三一）四月一〇日である。『御由来』には「壬子の年」とある。これは貞傳示寂の翌享保一七年にあたる。さらに前の「壬子」は寛文一二年（一六七二）となり貞傳の誕生前となる。またこれが「壬午」の誤記であつても元禄一五年（一七〇二）となり、貞傳が弘前で修行中の時期にあたるのでおかしい。

そのため河野は『御由来』を『北海道史』には引用しなかった。『御由来』の成立年代には考察する点はみられるが、河野は貞傳渡道を肯定していたようだ。明治四四年（一九一一）七月に刊行された河野常吉『北海道名勝誌』に次のようにある。

有珠灣頭ニ往古如来堂アリシト云フ。慶長十八年五月松前慶広船ニ乗ジ此地ニ至リ如来堂ヲ再興ス。現今寺院境内ヲ距ル五町許字「ウツコモリ」ニ地藏堂アリ堂外ニ善光寺仏ノ石像アリ方今之ヲ元善光寺ト称ス蓋シ其地ナラン廻国巡礼者等往々來リ詣ツ。寛文年中江州伊吹山ノ僧円空、享保年間津軽本覚寺ノ僧貞伝亦此処ニ來ル。文化元年幕府蝦夷地開闢ノタメニ東蝦夷地ニ

三寺ヲ設クルヤ善光寺其一ニ居ル。浄土宗増上寺末ニシテ大白
山道場院ト号ス。寺格ハ香衣檀林ニ準ジ僧秀暁住職タリ。文化
二年來着ス。寺祿年々米百俵、金四拾八両、十二人扶持ヲ給ス。
明治三年有珠郡支配伊達邦成現米二人扶持ヲ給ス。邦成支配ヲ
免ジ開拓使ニ引継グ。同七年ヨリ十六年迄十箇年間通減祿ヲ給
セリ。堂宇間口六間、奥行八間外ニ庫裡アリ。境内樹木多ク古
色蒼然タリ。¹²

これによると「享保年間津軽本覚寺ノ僧貞伝亦此処ニ來ル」とあ
る。河野は、貞傳渡道があつたとみていた。北海道立図書館北方資
料室「河野常吉資料」(請求記号M1650)によると、大正一〇年(一
九二一)八月、河野はウス善光寺の什物調査をしたようで、『北海道
志』一〇巻地理部と考証して、その記載に相違があることを書留め
ている。またこの中で、『御由来』と同じように村上嶋之允『蝦夷嶋
奇観』にあるウス善光寺の記事をも考証している。

犀川曰、貞傳津軽本覚寺住佛師ナリ、享保十七壬子年有珠ヘモ
参詣シタルモノ、如シ(貞傳ハ享保十五年死去セリ)

右は、貞傳を「津軽本覚寺住佛師」と表現しており、渡道時期を
「享保十七壬子年」としているのが、『御由来』と校合したものと考
えられる。享保一五年死去とあるが、これは一六年の誤記である。
河野が『御由来』を用いて考証していたといえる。

二、『御由来』の意識

次に『御由来』の内容をみていきたい。御由来には「慈覚大師御
難行記」という副題がついており、貞傳が慈覚大師円仁(七九四〜八
六四)の蝦夷地渡海を手記した形式がとられている。文体はいたつ
て抒情的である。しかしながら「慈覚大師」あるいは「貞傳」等の
固有名詞が文中に用いられていないので、『御由来』の主体が慈覚大
師円仁(以下、円仁)か貞傳であるのかが判然としない。またこの
中には山人の「いそ」なる人物が登場する。

『御由来』は、蝦夷地へ渡海した僧侶の視点で語られる。蝦夷地の
地名はみられるが、本州のどの地点から渡海したのか、どの地へ着
いたのかは不明である。しかしながら「御山」という単語が渡海前
と渡海後にはみられるので、本州の霊山から蝦夷地の霊山を目指し
て渡海したものと推測される。

従来知られている『善光寺縁起』とは制作意図が異なっているの
か、具体的な固有名詞は、ほとんどみられない。時系列としては、
蝦夷地に到着したのが、「壬子の年の秋九月十二日の子之刻あたり」
であつて、そこから「いそ」と出会い「十日二十日二月餘り」を過
ごした後に、船で移動し春ごろに「ウツコモリ」へ到着する。

次に載せる意識は、『善光寺縁起』をふまえ、報告者が適宜内容を
補足したものである。

① 蝦夷地渡海

どうしたとか、近頃の乾き果てたような御空の様子は、海原は遠く物の怪のようにゆらいでいる。いったいぜんたい、これはどうしたことか。海には黒いかたまりが、雲のように漂っている。御山をこそ果てだと思っていたが、悲しいかな、海のむこうには弘誓に洩れるものがいたのだ。

大願が成って数年、さらに混濁不浄の衆生を救済しようと、称名を唱へて浦へとこぎいようとすると、人々が走り寄って「どうして底も知れない大海へ漕ぎ出ているのですか」、「これは気の毒でしたか」、「渡らせてさしあげましょう」、「渡らせてさしあげましょう」と人々が御僧の渡海を助けようとした。

たとえ激浪がきても衆生済度の誓願があるので、どうして船がこわれることがあるかと言ひ聞かせ、法衣の袖にすがる信者とわかれた。それでも信者らは小船を押して海へ出た。

風は荒れ海鳴りがこの世のものとは思えない。船は木葉のように波にゆれて、行方も定かではない。沖へもついてきている人々に、詮無いことをして心苦しく思い、専念一向に仏の加護を願おうとして、船の端に立って西方浄土の弥陀如来、十方遍生の諸仏を拝すると、たちまちに天候が回復した。

壬子年の秋、九月十二日の子之刻あたりのことであつた。

② 蝦夷地上陸

祈祷によつて、空は晴れ渡り海鳴りもやみ風もおさまつて波もお

だやかになつた。すると浜がみえ、高さ五、六丈余りの岩が険しくそびえ立っている。その辺りには、山全体に巨木大材が深々と茂っており、秋ごろにも関わず、すでに白雪が降っている。見返すと山影が雲と見間違えるようである。これほどありがたい御仏の加護があるかと、海に向かつて拝み伏した。

人々を招いて風のあるうちに帰りたいと勧めると、「どうして人がいない島に、残せましょうか」と泣き叫ぶ人々に、「詮無いことで嘆くことです。僧とは三界を逃れる身です。人々は飢えや悲しみを覚える身です。早く帰りなさい」と岸へ降りた。

眼前の大国にこれからは我身によつて有縁の仏土にしようと思えば、身は鶴翼をつけたように軽く、心は宝珠をもつたように勇ましく思う。すげなく人々を帰らせ、樹の間から船を見送り、笠をかけ、錫杖をとつて奥へと分け入っていく。

四方に生い茂る草をかきわける。周囲に遮るものなく、険しく肌さむい。昼は名も知れぬ木の実や竹の葉をあさり、枯枝をたわめて庵を結び、ある時は溪谷に關伽水を汲み、またある時は明月に誦經の声をひびかせ、峻険な峰々や海で修行して幾日も過ごした。

③ 山人「いそ」との出会い

草木国土は皆尽く仏とは言うが、木石に心がないので結縁のしようがない。海波が漫々としている様をながめ、大いに嘆いて眉をひそめていると、白砂に異形の足跡がある。さてはと思つて足跡を追うと消えてしまった。

ここにも人間が住んでいるのかと思ひ、釈尊が羅漢を須弥に尋ねたように、三蔵法師が西域に宝巻を得たのと同じように胸が鳴つて、錫杖の音も鳴り響く。河をのぼると汀に紅い花が淋しく咲き、霜にやられてしぼんだかに見えるが、これは花ではなく実であつた。これを食べると、甘くて食に適したものであつた。

更に川の流に沿つて行くと、樹の間から煙がみえる。どこからか奇声が漏れ聞こえてくる。松のような木に大きな鳥の巢がみえる。何の鳥かと見ていると、毛物がするすると木から降りて目の前に立ちはだかつた。

錫杖で大きな音を鳴らすと、毛物は驚いて飛ぶように樹の間を走つて行つた。走つた影を見ると、毛物ではない。これこそ、韃靼・肅慎の果てである。「ここに住む人はいるか」と聞くが言葉は通じない。これは御山の麓に住む山人の「いそ」であつた。「いそ」とは、数日交流したけれども、相手が語る言葉はこちらに通じず、こちらの言葉は相手に伝わらない。お互いの表情で伝え合うのもおもしろい。

二ヶ月たつても川沿いの草むらを宿とし、樹皮をはいで足にあて、石を抱いては枕とし、秋も過ぎて降り積る雪にのどをうるおし、早朝に北斗星を仰いで、夕辺に月をみては修行を続けた。それを怠る事はないが、身は耕野の巷にあつて手には降魔の錫もありながら、どうして衆生と結縁できないでいるのかと、涙がとまらない。

④ ウス到着

御僧は、「いそ」とともに船をつけている「そまな」というところから、「めな」というあたりをへて、大河を二つ越へて、「しゝこい」川をのぼる。すると水かさが増して、舟が押し流される。流石に「いそ」と言葉は伝わらないが、いたわりをもつて、何となく見守つてくれる。岸へ着くと、嬉しいと思う間もなく、まだ見ぬ大河が横たわる。そこから船はさらに六・七日かけて岬々たる大山のもとを通つて「れんけ」というところに着いた。すばらしい場所に着いたことを御仏に感謝する。長く船の上に居たので体はなえているが、断食を七日間修した。

このころになると、ようやく「いそ」の言葉もおぼろげながら理解してきた。「れんけ」よりさらに行くと、如来が示現したような大白山の麓の「ウツコモリ」に到着した。見ると、春黛の諸山が遠くつらなり、北斗の方角には、高い富士のような御山が紫雲をまといている。西南には海のような湖が広がって底も見えない。無憂樹の枝はみられないが、古の鹿野苑に似た光景が広がる。これこそ詣願の成就である。あなかしこ、あなかしこ。

三、『御由来』解釈

『御由来』で主体となるのは副題から察するに、円仁と考える。この『御由来』はおよそ四つの構成に分けられる。①蝦夷地渡海、②蝦夷地上陸、③山人「いそ」との出会い、④ウス到着である。

このうち①の蝦夷地渡海の場面では、副題の『慈覺大師御難行記』とあるように、渡海場は円仁開基の由来がある下北半島の恐山であると思起させる。また「大願」とは、『善光寺縁起』を具にみると円仁が恐山に地藏菩薩を安置して一字を建立したと了解される。これらから、円仁が恐山から蝦夷地へ渡海した場面と解せられる。さらにこの場面では、円仁を見送りに来た信者らとともに海難に遭い、これを円仁が祈祷の力で鎮めている。またこの場面で円仁は、阿弥陀如来と十方遍生の神仏に願っており、その後阿弥陀如来が本地とされる霊山ウスへ向うことも示唆されている。

これは恐山の海上安全の利益に由来するものではないか。下北半島では、一般に「死ねばおやま（恐山）に行く」といわれている。海の宗教には、弁天・荒神・天妃・金毘羅などさまざまあるが、恐山もまた海で亡くなった仏を祀る山として信仰された。恐山の海難に因る死者供養が、現世利益と結びつき、円仁作の延命地藏菩薩をまつる恐山信仰となったとされる¹³。

諸国の海商は、恐山に常夜灯を寄進したのであるが、この信仰が『御由来』にも端的に表れているといえる。すなわち円仁は海難を鎮める法力を有しており、この利益は円仁渡海によって蝦夷地へももたらされたと解せられる。『御由来』では、下北半島と連関させた当該地域の信仰を端的に見てとれる。

次に②の場面をみると、高さが五く六丈（約18m）の岩が険しく、山全体に巨木が茂る地に到着したとある。恐山を出て到着した先の山も「御山」と表記している。すると到着した先もまた霊山であっ

たと考えられる。到着したことを喜んで円仁は海に向かって拝み伏しているが、これは恐山を拝んだものと考えられる。

さて下北半島から蝦夷地へ渡海した地でも修行する。この場面では、「木の実や竹の葉をあさり」とあって、円仁が木食行を修していることがわかる。さらに峰々を歩いて草庵で暮らし、溪谷に關伽水を汲んで、明月を待つなどの月待の行を修している。これらは山岳修行の特徴である¹⁴。

次に、③山人「いそ」との出会いをみる。円仁が、砂浜に足跡をみつけ、意気揚々と川上をのぼると、甘くて食に適した実を見つかる。木の実や山菜が豊富な場所、一帯が木食行に適した場所とわかる。木食行とは、穀類を断って木の実や山菜などを食べて修行することをいう。木食円空や木喰行道のような回國行者が訪れているが、そのような行者の修行を連想させる。

大木からすると降りてきた「いそ」を「毛物」とみまがえ、錫杖の音に驚いた「いそ」をみて、「たつたん」「しくしん」の果てであると判じている。「たつたん」とは、韃靼のことと考えられ、元滅後に北方へ逃れた蒙古系民族をさし、「しくしん」とは「肅慎」の意で、中国古代の北方民族をいう。

その御山の麓に住む山人の「いそ」と問答するが、言葉は通じない。『御由来』で唯一名前が登場するのが、この「いそ」である。萱野茂によれば、「イソ」はアイヌ語で豊漁をさし、「イソン」は狩上手をさすという¹⁵。円仁は、ここで二か月間修行する。

最後に④の場面である。「いそ」が先達となってウスへ同道する内

容となっている。円仁は「いそ」とともに「そまな」を出発し、「めな」を経由して、大河を二つ越え、「しゝこい」川をのぼるとある。途中、水かさが増して、舟が押し流されるが、「いそ」の助けをかりてすすんでいく。大河をわたり、そこから船で六・七日かけて峨々たる大山のもとを通って「れんけ」に到着したという。

「れんけ」とは、現在の礼文華のことであろうか。ここまで移動は船でしたようで、だいぶ弱った姿がかかれている。それをおして断食を七日間修して諸仏に感謝する。このころになると、ようやく「いそ」の言葉もおぼろげながら理解できるようになったとある。

さて「れんけ」からさらに進んで、大白山の麓の「ウツコモリ」に到着した。この場所は河野がいうように、もともとウス善光寺があった場所である。現在は、この場所にはウス善光寺が管理する地藏堂（伊達市）があつて、海中から出現したと伝わる延命地藏菩薩が安置されている。『御由来』では円仁が苦難の末にウスに辿り着いた場面で終わる。

以上、『御由来』はウス善光寺の円仁開基を語る資料であることは明らかである。円仁が霊場恐山から、蝦夷地に渡海し、苦難のすえに霊場有珠山へたどりついたことが、暗にウス善光寺の円仁開基由来だと示唆されている。さらに『御由来』が貞傳手記とされる点にも大きな意義があると考ええる。次に、貞傳信仰についてみていきたい。

四、貞傳信仰と漁業

貞傳信仰は、漁業と深くむすびついている。貞傳の伝記である『東域念仏利益伝』に次のような記事がある。

讃岐塩飽の船生長喜屋善四郎といへる者。年々商賣のため津軽に下る。享保八年癸卯の三月。大阪より發船し下りしに。津軽領深浦の沖にて俄に大難風に逢ひ一船二十餘人の水主おの／＼丹心に佛神に祈請しけれども効なし。船簸蕩してすでに危く見えし時。船主善四郎。去年の春今別の旅宿。美濃屋忠右衛門に表具の事頼れし貞傳和尚の名号の事思ひ出し。頓てこれを取り出し船の表に懸け奉り。一船の諸人一心に声を發して念佛祈願せしかば。風波たちまち妥帖になり。難なく西の濱岩崎といふ所へ着岸せり。善四郎並に二十餘人の舟子ども其宿忠右衛門を同道し。早速本覺寺へ来り。彼名号をも持参し。船中の事共具に申演て十念を受け各拜謝してけり¹⁶

貞傳は信者の者たちに名号を授けた。讃岐国仲多度津郡塩飽島の船主長喜屋善四郎は津軽領深浦の沖で大風にあい危うく沈没しようとしたとき、貞傳から請けた名号を船の表にかけて全員で念仏を唱えると風波がたちまちおだやかになったという。

この事例のように貞傳の名号には海難除けの利益があると信仰された。こうした利益が海の神である龍神や船の神そのものである船玉の利益と習合して独自の貞傳信仰となった。この信仰は津軽にとどまらなかったようで、享保一二年（一七二七）、『山形日記』に次

のような記録が残る。

一、六月廿三日ヨリ七月廿三日迄今別本覺寺貞傳和尚金銅塔婆建立供養有之南部秋田松前ハ不及申近國ヨリ參詣群衆シ而外ヶ濱前代覺無之由和尚六字之名號ヲ授ケ候由名僧之旨申候¹⁷

右より、貞傳信仰が津輕のみならず南部・秋田・松前へと広がっていたことがわかる。この信仰は蝦夷地へも伝播した。串原正峯『夷言俗話』（二七九）には、ウス善光寺の「本尊は南部今別本覺寺五世貞傳和尚の作佛」¹⁸としている。一八世紀後半には、貞傳仏がウス善光寺に伝来していたことがわかる。

さて串原は、貞傳を「津輕」ではなく「南部」と記している。これを考えるに、一八世紀後半には、ウス場所へ下北から渡海する労働者が多かったことに因るのではないか。蝦夷地へ出稼ぎに行くには津輕海峡を渡らなければならない。現在も津輕海峡は潮流の速い難所であるため海難除けの利益が求められている。そのため貞傳仏が津輕から下北へも海路をつたって伝播したのではないか。

これを示すように海難除けとして貞傳の万體仏は当時人気があった。これは高さ一寸二分（約3・6cm）の阿弥陀如来立像である。この利益については後程記す。貞傳の名号や仏像を持てない人は、本覺寺境内にある金銅塔婆背面の名号を拓本して懐中した。この金銅塔婆は『今別町史』によれば貞傳の墓所であるという。

鑑みるに、この拓本には、貞傳から印施されたものと同じ利益が期待されたであろう。近代以降、礼文島でニシン漁が盛んであった頃には、今別からも網元衆やヤトイがこの名号を懐中して出港し

た¹⁹。万體仏の代替である。

おなじく本覺寺の多聞天堂は享保四年（一一一九）に貞傳が発願して建立した堂宇である。青森県立郷土館の民俗調査（一九八七）では、近在の漁師は出漁前に多聞天堂に御神酒を供え、豊漁と海上安全を祈願するとある²⁰。松前でも貞傳の万體仏を所持すると幸せになるとされ、やはり漁業関係者の信仰があり、船魂として用いられたとの指摘もある²¹。蝦夷地においても貞傳の利益が期待された。貞傳信仰を背景に『御由来』が成立したとみてよいだろう。

五、蝦夷地の貞傳信仰

さて『御由来』には、「津輕本覺寺住佛師」とある。蝦夷地において貞傳は仏師とみられていたようだ。文化六年（一八〇九）に記録された『東夷竊々夜話』の「宇壽場所様子大概書」によれば、貞傳仏がウス善光寺本尊になる前は、地藏堂（伊達市）に安置されていたとある。また本尊について「阿弥陀三體有之候内一宇宇壽場所え安置致し置候由」²²を伝え聞いているとある。これを解釈すれば貞傳作の阿弥陀仏が三體あつて、これらが蝦夷地に伝来したと解せられる。貞傳は今別本覺寺住職であつて仏師ではない。これは貞傳仏の利益が蝦夷地で広まっていたためだろう。

松田傳十郎『北夷談』（二七九九）には、南部・津輕辺より「白善光寺参り」として参詣人が多く、老アイヌ曰く、本尊は網にかかった「鍬仏」で、燃えるような光明とともに出現したもので、不漁ま

たは悪しき病氣等があるときは、参詣して祈願すると効があるという²³。この「鎮仏」が貞傳作阿弥陀如来立像とみると、貞傳が「仏師」とみなされるのも首肯できる。蝦夷地における貞傳信仰は、まず利益が期待された貞傳仏が蝦夷地に招来し、これをもって信仰の対象とされたのだろう。

五来重は蝦夷地の流水灌頂をして「海難供養者のために円空にたのんでつくってもらった観音をながしたり、豊漁祈願でながしたものが、漂着してまつられた」²⁴としている。貞傳仏の海中出現も善光寺信仰のみならず、ウスで流水灌頂がおこなわれたことをさすと思われる。

坂倉源次郎『北海随筆』（二七三九）には「絶頂焼崩れ臼の形の如くに残り麓に善光寺の弥陀とて安置せり。蝦夷も是を尊敬し不思議の奇瑞も有よし云傳ふ、（中略）西は太田山、東は白ヶ嶽とて信心の者は参詣するなり」²⁵とある。アイヌも善光寺如来を「尊敬」していたという。もともと善光寺信仰のある当該地域に貞傳仏が伝来したことで、蝦夷地においては仏像の靈験が期待された信仰になったと考えられる。それはウスを訪れ、作仏を残した円空（一六六六）や木喰（一七七八）らも同様であったといえる。

つまりウスの霊山としての機能が、聖の参詣をうながし、貞傳もその一人とみなされた。これによって貞傳渡道の伝説が付随することになったと考えられる。一八世紀後半には貞傳仏が介在した善光寺信仰がウスにあったといえる。傳十郎の言葉を借りれば南部・津軽の信者が「白善光寺参り」を盛んにしていたのであるが、これら

信者によって貞傳信仰がウス一帯に根付いていったと考えられる。

串原正峯の『夷諺俗話』（二七九二）には、「ウス嶽の事」に阿弥陀如来の堂の本尊は南部今別本覚寺五世貞傳の作仏で、如来堂のうちには百万遍の数珠や鉦があり、アイヌも集まって百万遍をくり、念仏を唱え、回向願文も日本言葉で言ったとある。また貞傳が甚だ道徳のある和尚でこの作仏は奥筋の者どもが甚だ信仰をなすところであるという²⁶。今別は津軽半島であり「南部今別本覚寺」とするのは誤りであるが、これは当時の下北半島では貞傳の信仰が篤かったことを指すのだろう。

さてウス善光寺の日鑑によると、蝦夷三官寺となつて文化三年（一八〇六）、二世鸞洲がアブタ・ウス両場所のアイヌ五〇〇人余りをよんで百万遍念仏を行っている。串原のいうように、そもそも当該地域のアイヌらは念仏を唱えていたようで、回向願文も日本語で唱えていたとあるから、これは特有な事象であるとみられる。文化年間ごろのアブタ・ウス場所のアイヌには、念仏を受容する素地があったとみてよいだろう。

六、貞傳と万体仏

貞傳信仰が蝦夷地に入ってきたのは一八世紀後半のことと考えられる。串原は、クナシリ・メナシの戦い（一七八九）で生き残った和人傳七の所持品に万体仏があったことを書き留めている。

南部大畑村傳七といふもの、貞傳作の銅佛壹寸八分の彌陀尊像

を所持なし、年頃信仰せしが、尊像の靈驗によりて蝦夷地にて大難を除かれたる其譯は、(中略) マメキリ傳七に向いふ様は、其方に尊き佛像を所持有るよし兼々聞及ぶ所なり。夫を此方へ渡し可申といふ故、傳七日頃身を離さず大切に信仰なす所の貞傳和尚作の阿彌陀如来厨子入の尊像、其秘藏なす所といへとも一命にはかへがたく思ひ、(中略) 尊像其外米、麴、酒、烟草、木綿、小間物類、代呂物不殘相渡しければ、夫を夷とも背負てマメキリが家へもち運ひたり。(中略) 進退爰に極りたりとて、覺悟してゐたりしに、程なく間近く成て、アツケシ婆々なりと聲々に旬り参りし故、兩人も安堵して、(中略) マメキリにとられたる尊像並に交易代品物等取返し、伝七へ渡したり。かやうに危ふき大難を遁れ、尊像も先の手へ一たん渡しけれども、又々伝七が手へ戻りしも、尊像の靈驗尊むべし²⁷。

クナシリ・メナシの戦いによる被害者は和人計七十一名が殺害され、直接の加害者とされたアイヌ計三七名は入牢となり斬首、処刑された。傳七は、ムシリケシのアイヌがマメキリに助命嘆願したため、釈放された。さらにアツケシのアイヌらの尽力で「私諸道具迄徒党の蝦夷より取返」²⁸されている。

以上のことは、万體仏の靈驗であると串原という。傳七所持の万體仏は、厨子入りの「銅佛壹寸八分」(約5・4 cm)で、貞傳の伝記である『東域念仏利益伝』記載の「一寸二分」(約3・6 cm)と比べると一回り大きい。これは万體仏が貞傳死後に鑄造されたためであろう。北海道博物館所蔵の万體仏も約5 cmほどの大きさである。こ

れらも貞傳の死後に鑄造されたものと考ええる。

飛驒屋傳七は貞傳を信仰していた。クナシリでも傳七は肌身はなさず万體仏を所持していた。そもそも飛驒屋は享保四年(一七一九)三月から有珠山の伐木を請負っており、その後もヲサルベツ川を基地に山へ入っている。そのためウスの御堂は、飛驒屋に雇われた下北半島からの労働者の信仰対象となっていた。時代的にも貞傳が活躍した時期に重なり、万體仏をはじめとした貞傳仏招来の契機となったのではないか。

ウス一带は靈場として機能しており、また平秩東作『東遊記』(一七八三)には「松前より東にウスといふ所あり。是に善光寺をうつして靈佛たゝせ給ふといふ。信州の佛はウスの上に立せ給ふ。白といへる名によりて善光寺をうつすなるべし」²⁹とある。

東作のいうように蝦夷地にあつてウスには信州善光寺信仰が早くからあつた。さらに円仁開基がこれに加わる。『善光寺縁起』はウス善光寺二世鸞洲に随従した大基によつて文化三年(一八〇六)に書かれたものとみられる。

行東蝦夷地の海岸大白の麓に來りて、江山の有様心とまりて覺え給ひしかば、樹下の石に草を敷ひて一夜を明し終夜弘法利物の回顧して衣にかくる珠よりも木の間の袖の梅雨しげく四無量三昧に入て悲願ねもごろにましませし曉に、ふりさけ見れば峯に残れる有明の月ならで、瑞光耀々として紫雲靨たり、大師未曾有の思ひをなし峯頂を望み給ふに奇なるかな一光三尊の阿弥陀如来雲間に住立ましく光明遍ねく照して山海金色となりぬ

大師は尊顔を瞻仰して礼拝讃嘆し、一心合掌して広度衆生の志願を述給ふに忝も如来微笑して告給はく、我衆生を待て心に間断なし汝か発願こそ我本懷に称へり、然りといへども、時いまだ到らず汝唯利生の縁をなし当来の益を期すべし我跡を信州善光寺に垂るといへども今より此地に影向して機縁を調停すべし、汝が願心わが大悲に譬じて歩みを此地に運ぶ者は往生浄土の勝因たらんと、ねんころに示し給ひぬ大師はまのあたり金口の靈告を得て歡喜斜ならず、当来此地に於て仏事を施作し広く衆生を利せんと、渡海の志願満足せりと雲にかくれ行く真容をうつして木造を彫み藜を折りて小宇を結び安置し奉りて当来の利物を願じ日本へ帰り給へり、是すなほ本尊降臨の縁由善光寺と呼ならはせる基本なり³⁰

右の『善光寺縁起』によると、ウス善光寺は円仁が一光三尊の阿弥陀如来を感じて創建したものである。蝦夷地における善光寺信仰のもつとも古い記録は、松前家の事蹟を記した『新羅之記録』（一六四六）である³¹。これによると、ウスには善光寺如来御堂の旧跡があつて、時々称名の声・鉦鼓の音が聞こえ、アイヌらは奇異の思ひをなしたという。この御堂は、松前藩初代慶廣（一五四八〜一六一六）が慶長一七年（一六一二）冬に夢のお告げをうけ、翌年に建立されたものであるという。これには円仁開基についてはふれられていない。

七、貞傳手記と円仁開基

ウス善光寺の円仁開基もまた貞傳仏と同じく下北半島から入ってきたものではないか。東北地方には円仁開基を縁起に持つ寺院が多く、山寺として有名な立石寺（天台宗）、恐山の菩提寺（曹洞宗）は殊に知られている。東北地方の寺院で円仁の開基と伝えている寺院は一四〇寺、中興とするものが二二寺、円仁に関係する遺芳があるのは一六九寺もある。これら円仁開基には①比叡山の堂舎・儀式の草創者としての伝説、②浄土教による往生伝説、③地方布教と靈驗伝説の混合した寺院開創伝説、④入唐中の苦難を象徴化した伝説などがみられる³²。

このうち『善光寺縁起』と『御由来』では③の地方布教と靈驗伝説の混合した寺院開創伝説の要素がみられる。とくに『御由来』はその傾向が大きいと考える。これらの略縁起を地理的に具現化すると、下北半島と東蝦夷地との親和性がみられる。つまり地藏菩薩が救済する地獄（恐山）の先には浄土（ウス）があつて蓮池（洞爺湖）と阿弥陀如来（ウス山）を遥拝する位置関係となる。

渡海する下北半島の雇人が想起した恐山の他界をウスにも重ねた形となる。結果、円仁を軸とし、海峡をはさんだ広域な霊場が形成されたと考える。『善光寺縁起』には、従来あつた他界観や貞傳信仰を用いて、参詣者を呼び込む意図もあつたのだろう。

恐山は亡者の魂がいく霊山である。文久二年（一八六二）に勤修された恐山開山一千年祭には、加賀・能登・大坂・堺・仙台・福山・

箱館・古平・小樽の廻船問屋・豪商・漁場主から常夜灯が寄進された。これは日本海と蝦夷地を往復した海運業者が海上安全を祈願したものである。恐山信仰には死者供養と海上安全祈願などの現世利益という両面がみとめられる³³。文化七年（一八一〇）には、恐山菩提寺の別当、曹洞宗吉祥山圓通寺によって『奥州南部宇曾利山釜臥山菩提寺地藏大士略縁起』が版行された。

恐山の常夜塔をみると、場所請負人として有名な山田文右衛門や「松前支配人」「松前伊達手船船頭船中」「フルビラ番人中」「ヲタルナイ場所浜中」などからの寄進がみられることから、西蝦夷地まで恐山信仰が伝播していたことがわかる³⁴。

以上のような宗教的需要の高まりが恐山信仰の隆盛となり、同時代的にウス善光寺は蝦夷三官寺の一つとなり、寺域が整備された。そのような中で版行された『善光寺縁起』（一八〇六）には、ウス一帯を持場とした浄土宗寺院の由来が求められただろうし、また近隣の参詣人を集める意図もあったろう。『御由来』には、種々の利益が期待された円仁・貞傳という二人の名僧を登場させたことに、当該地域の信仰的需要が端的に表れているといえるのである。

おわりに

以上、『御由来』の資料紹介をした。従来、顧みられなかった資料ではあるが、津軽海峡をはさんだ信仰の伝播を知る上では大変重要な資料である。以下、特徴を三点あげる。①『善光寺縁起』と異なり、

円仁によるウス上陸が書かれた点、②「いそ」が先達となって円仁をウスへ導いている点、③『御由来』を貞傳が手記したと伝承している点である。

貞傳は伝説の多い僧侶であるのだが、これが津軽半島にとどまらず、北海道にまで及んでいる点に注目したい。貞傳信仰は享保期に津軽・下北半島から東蝦夷地へ渡った雇人によってもたらされたものと考えられる。『御由来』は、津軽海峡をはさんだ信仰の伝播を窺える資料である。

本資料が北海道庁寄託本であった性格にも因るのだが、河野常吉によって考証されたものであることも再度言及したい。そもそも『北海道史』編纂のために収集された写本ではあるが、これを校合に用いていたと思しい。しかしながら、引用されることがなく、翻刻されることもなかった。

また『御由来』によって示されたのが、恐山と有珠山の津軽海峡を挟んだ広域な霊場の形成である。これは下北半島からの海運業者の往来に因んだものと考えられ、円仁を軸とした二つの霊山の親和性が注目される。同時代的な略縁起の作成など、両地域における往来が増加したことが宗教的需要を生み出していったと考えられる。この霊場の形成については別稿にて詳細に論証していきたい。

本稿では、北海道における貞傳信仰の実態を考察するうえで、『御由来』の紹介が必要であると考え、報告するにいたった。北海道における仏教の伝播をみるうえで貴重な資料といえるのである。本稿が貞傳信仰研究の基礎資料の一つとなり、今後の研究の一助となる

ことを期待したい。

(みやもと はなえ)

〔凡例〕

一、『大白山御由来』（袋綴装・合本）の翻刻にあたり、底本を北海道大学附属図書館北方資料室蔵本に採った。明治四〇年（一九〇七）六月二〇日に胆振国有珠町（現、伊達市有珠）の吉田家にて書写されたものである。

一、行取は凡そ底本通りとし、丁数を各丁末に付した。

一、漢字はなるべく原文のままとし、仮名は通行の字体を使用した。

一、文中にある句点は、原文のままである。

〔翻刻〕

貞傳手記

明治四拾年六月二十日膽振國有珠町住

吉田家採訪史料

（享保年代津輕本覺寺住佛師貞傳記之）

〴 01
オ

大白山御由来

〔慈覺大師御難行記 貞傳手記〕

いかなれはこの年頃の乾き果てたる御空のたゝつまへ、海

原遠くゆら／＼とものゝけの立にも似てと見てあるに、そも

や、そはそにあらずかし、積水漆漫油の如くなるに

粟稗のかたまりとも似やらぬ黒やかなるが、雲ともつかすた

ゝよゑることの可笑しさよ、さては御山をこそ、重齢

の果てとも覚へつるに、悲しやな海波のあなた弘誓に

洩るゝものありとは覺へたり、あな〔虫はみ

〔

〔

大願こゝに成るも彼岸の衆生や什麼にと日毎の空にあ

おかぬあさもなく夜毎の波にともわぬ夢もなし、〔

〴 02
オ

其年もくれ又の年も暮れぬ、あはれ花の臺のをとゝ

の意も空州の春に隠れさせ、いたわしき玉葉も

秋風に散り玉へ、今はとて都にも心なくてなん、あわれ

混濁不浄の身をも大悲の光明を雲烟の彼岸に

導は数にもあらねは、よは水泡にも消えかしと、ある

朝衣の袖をはすほりて口に称銘を唱へ一捍の掉

に浦こきいでぬ、人々走あはてり、いかに底ひも

知れぬ大海をはいつこをさしてあこかれ給にや、

こはいたわしくものぐろいにや、渡らせ給やらん、

あはれとゝまらせ玉ひてよ、いなどよ人々、佛の

慈悲は遍漫なり、激浪例へ九天を浸すとも

弘誓の御舟はいかで朽ちやれべきそと、法衣の

袖にすかれる衆生をはずげなくも打ふりて立むづ

〴 02
ウ

るに、有難きは人の心なりけん、我も／＼と艚と

りかい押し送り付たるに、風あれ海鳴りあは

れ此の世からとも思はれぬるに、舟は木葉の如く、

波のうね／＼ゆりにゆれて、越方行末もさたかならず、

御山の上にては程遠からぬと覺しに、さては、

いつれとさためぬ沖の上、迷しか壽しか、むさ

き我身はもの数ならね、まもらい越せし人々の

痛しさよ、詮なき事してけりと心苦しふは、あん

なれと、今ははやせんようもなくてなん、あはれ此の上は専念一向に御佛の加護をは願はんめれと、船ばたに立ちて西方浄土の弥陀如来扱ては十方遍生の諸佛を拝し、身は浮草の波の間にくたゝよへるにも似たりしか、あら嬉しや忝

ㄥ
03
オ

けなや、壬子年の秋九月十二日の子之刻あたり一天晴れ渡りて海に音なく、風納りて浪滑かになりつると、見れはこはいつこいかなる浦濱にや、たけ五六丈に余る岩さかしくそはたちて、其の陰は満山巨木大材深々として蔽ひ重

れり、白雪早々其の上に降りぬ、見返れは御山の影遙かにして雲かとも見ゆ、あはれなんぼう有難き御佛の加護もやと砂に伏して越し方を拝み参らせ、人々を招きて風のる間に綱とき玉へ、と勧めしに、なとか人氣もなき此の島根のさむしろに、御僧許りは、残し参らせてと泣き叫ふをは、よしなき事をなけかるゝものかな、僧は是三界脱離

ㄥ
03
ウ

の身、人々にはうゆもの悲しきものゝ覺るゝ身達の

なり、早々帰らせ玉へと岸に降る、流石別れの惜まれぬにはあらねども眼前の大国にこれよりは我身に依りて有縁の佛土と化すべかんめれと想へは、身は鶴翼をつけたるか如くに軽く、心は寶珠をぬきりたとんか如く勇し、あはれよしなく振り返りもせは人々の心やあとに引れて帰さに遅れもよと、すげなく走せて樹の間にかれぬ、船も見へすなりぬ心安しと笠かたむけて、錫杖とりなほし、とほくと名もなき小笹岩角足にまかせてあゆみしか、陰草朦々として四辺に無の奇意峭々として肌にさむし、急かぬ旅は山をこへ流に

ㄥ
04
オ

従ひ、昼は名も知れぬ木の実竹の葉をあさり、秋は枯枝をたわめて庵を結び或時は溪谷に闕伽を汲み、或時は一湾の明月に誦經の声を高らめ、嶂嶸に休すらい海波に添ひ、抑もや幾日を経たりけん、悲しやな此の根の国土に人も住まづ鳥も寐らぬにや懷抱の素願は、草木國土悉皆成佛と言ひつれとも、木石心なければ結縁のよすがもなし、と一夕海波の漫々たる

をなかめ、浩嘆の眉をしそめしに、あら可笑しや、白砂に印せし異形の足趾、扱てはと我にもあらずあとたどれば、大いやかなる川辺に添ひて行く／＼遂いに消へ失せぬ、扱ては

ㄥ
04ウ

此の水上には人もや住むらん、釈尊は羅漢を須彌に尋ね、三蔵は西域に寶巻を得られ

しにも似たるよと胸とゝろき、つきたる錫杖も念願の到達に思はすわな／＼と振ひ鳴りぬ、河を降れば汀に紅き花淋ひしく咲き、

霜にもしほれでやと近つき見れば、こは花にあらで實なるべう、一日の労れに五濁の身はさもしくも飢つれば、御佛を念して一菓をついばみぬ、味甘くして食慾に適すると覚へたり、蘿打払ひ又たちあがり流に添へは、闇き道生茂りたる樹の間に一抹の烟楼々しくくんづ、こは是れと足を早めて奥深く進むに、何處よりか奇声漏れ来りて

ㄥ
05オ

風なきに林樹ゆら／＼と戦くに驚き仰けは松に似たる木の二股に、大いやかなる巢の彼方

にも此方にも作られぬ、あはや何鳥にやと見てあるに、ますらにもあらぬ毛物の、する／＼と木を傳へて降りたるとみしまに、すつと降り我か前にたちはだかりぬ、恐るゝとはあらねとも、流石に驚き錫杖ち地につけは、其の音空林に響きて樹々声あるか如し、毛物これに驚きけん飛ふか如くに樹の間に走せ行きぬ、あら愚しや凡夫の眼はくらみやすしと聞つるか我も又これには洩れさりけん、走りし影を見ればますらにもあらず、毛物にもあらざるぞ、これをこそ、たつたん、しくしんの果て

ㄥ
05ウ

走り来りて、本土に住む人のありきと聞つるに、あはれそれにもやと克く見れば、これは是れ御山の麓に時々はさまよへる山人のいそなりけり、ひと日、ふた日と交れとも彼の語るは我に透らず、吾かものゆふは、いそわきまへず、眉つり揚げ口そひやかし、手ふり肩あけ遂へにはかたみに目のみ光らすこそ、こよのうも可笑しけれ、十日二十日二月餘りになりぬれども、空しく川添の草村をやと／＼し樹皮をはぎては足にあて、石を抱きては枕とし、

秋もすから降り積る雪にのどをうるおし、
晨に北斗を仰ひて遍照の佛光とし夕辺
に月を踏んで円満の影となし、戒信修

〴〵 06 オ

蒙寸時も怠る事なけれとも、改悔の實は
未だ薄きにや、妄語の罪の程等去らざる
か、身は耕野の巷にあり手には降
魔の錫もありながら、なとて結縁の心
にまかせて、浮心常住に迷ふやと、水天
の渺々を望み、岩峭にはふり落る涙
せきやらず。

愚僧の舟のつけたるはそまなと申せしが、そ
れよりめなど言ふあたり大河二つまで越へて、
しゝこいと言ふ川を河上遠くめくれりと覺
ゆ、水かさ、増りて舟押しなかせられぬ、流
石に詞もわかぬいそながら、乗りたるものを
いたわると知りてか、何となくみまもるともみゆ、

〴〵 06 ウ

岸に／＼にとこく舟の漸く近くなりぬれば、
あら嬉しやと思ひし程もなく、またみぬ大
河ほふはいとして落ち来るに〔虫損 〴〵〕
舟また〔虫損 〴〵〕指して向へされると申しき

是より又くがを見みさること六七日峨々たる
大山のもとを通りてれんけとなん申す處につきぬ、
あはれ御仏のみゆつにて、かくも目出度き、
處に船づけてよと有難さに拝方に向ひて
合掌の誠をつとめき、小舟にゆれたる身
の綿の如くなへて、食を断つ事一七日許り、
漸くにいその言も臆ろけなから知るよう
なれり、レンケより又たとり／＼て后年
如来の慈現せられし、いともありかたき

〴〵 07 オ

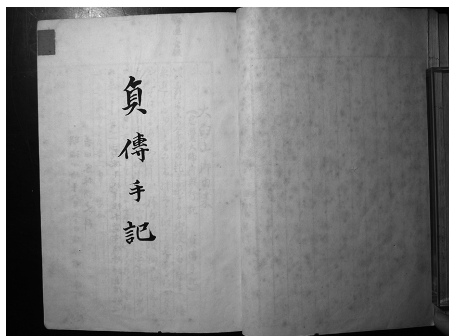
大白山の鬱^{鹿藿}ウツコモリに至りつきぬ、打見れば
春黛の諸山蜿蜒と遠くつらなり、北斗の
かたにいと高き富士にもよへる御山の、
紫雲に現はれ、拝ろかまれぬ、西南の方海
にめぐり、にほの海にも似たるか、ひろご
りて、碧波漆湛としてそこひも見へず、
あわれ無憂樹の枝は戦かねども古の鹿野
薙にも似て光景の立勝りしは、是れをこ
そ詣願の成就、霏雲の闌開とも言ふべ
けれ穴賢々々

〴〵 07 ウ

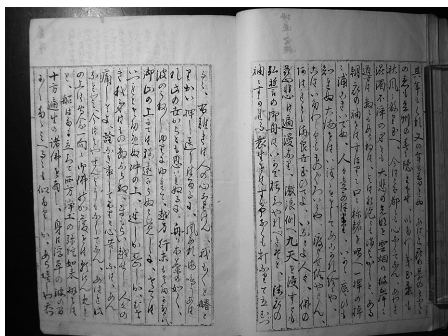
（みやもと はなえ・歴史地域文化学専攻）

〔影印〕

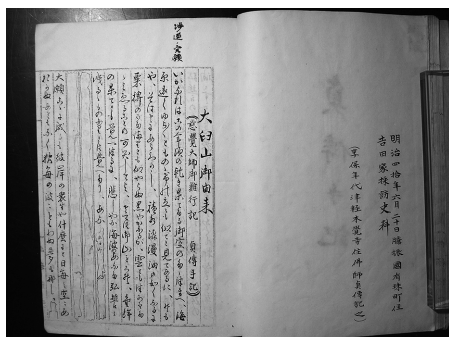
写真① 01才



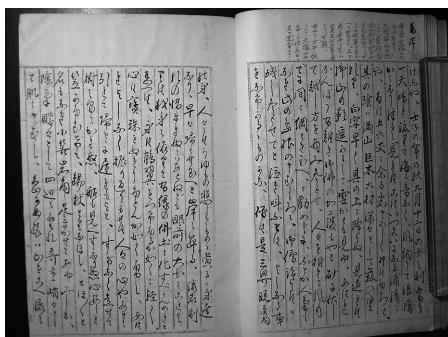
写真③ 02ウ・03才



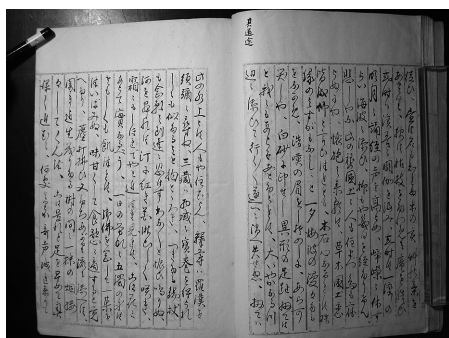
写真② 01ウ・02才



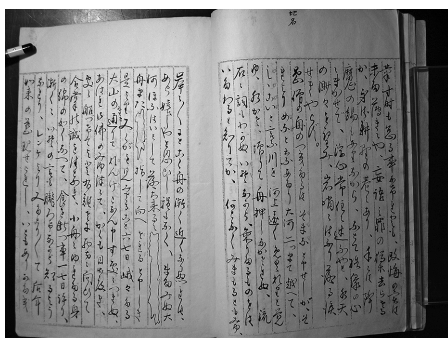
写真④ 03ウ・04才



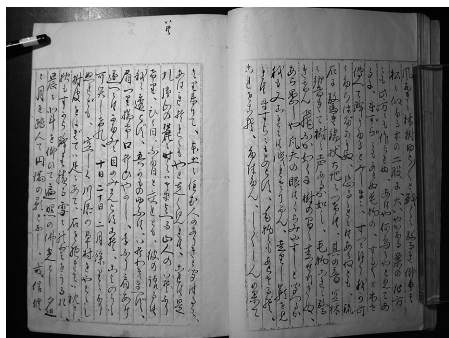
写真⑤ 04ウ・05才



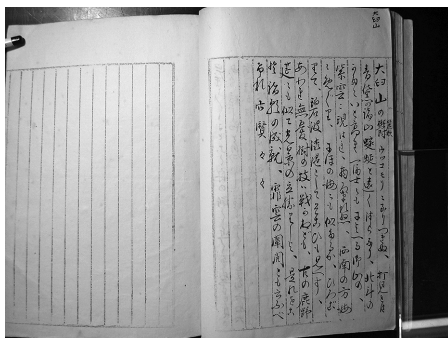
写真⑦ 06ウ・07才



写真⑥ 05ウ・06才



写真⑧ 07ウ



注

- 1 函館市中央図書館蔵『蝦夷地大白山善光寺縁起』（請求記号、K・一八五・エソ・五〇〇一）。『壮瞥町史』（壮瞥町、一九七九年、一二一五～一二一六頁）に翻刻が所収されている。
- 2 北海道大学附属図書館編『日本北辺関係旧記目録』（一九九〇年）。現在、『北海道大学北方関係資料総合目録』としてデータベース化され、一般に公開されている。
- 3 『御由来』三丁裏。欄外に朱書きされている。
- 4 石村義典『評伝河野常吉』（北海道出版企画センター、一九九八年、二七四～二八七頁）。
- 5 本稿では、北海道庁大正七年（一九一八）刊の複製である河野常吉編『北海道史』（北海道出版企画センター、一九七五年）を用いた。
- 6 須藤隆仙「貞伝万休仙などで尊信を集めている偉僧」（『北海道と宗教人』、教学研究会、一九六五年）にウス善光寺境内にある宝洲納経塔をして貞傳伝記作者である鶴阿宝洲が取材にきたとし、貞傳渡道の証拠としている。
- 7 宮本花恵「津軽今別本覚寺貞伝上人伝を巡って」（北海道東北史研究会編『北海道東北史研究』一一号、掲載予定）。
- 8 肴倉弥八編『今別町史』（今別町、一九六七年、五四～六九頁）。
- 9 星野和太郎『北海道寺院沿革誌』（時習館、一八九四年、三八頁）。
- 10 内田邦彦「津軽口碑集」（郷土研究社、一九二九年、三六頁）。
- 11 渡辺茂編『新稿伊達町史』（三一書房、一九七二年、二七九頁）。
- 12 河野常吉『北海道名勝誌』（河野常吉著作集）三巻、北海道出版企画センター、一九七五年、九九頁）。
- 13 鳴海健太郎『下北の海運と文化』（北方新社、一九七七年、一三九～一四九頁）。
- 14 宮本花恵「出羽待定法師忍行伝下」翻刻と解題」（『学苑』八五七、六

- 七～一三七頁）で、諸国の霊山で行った待定法師の忍行を報告した。
- 『御由来』の修行にもまた待定のような山岳修行がみられる。
- 15 萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』（三省堂、一九九六年、五六頁）。
- 16 家蔵本、元文二年（一七三七）板、鶴阿宝洲『東域念仏利益伝』上巻（一九丁ウ～二〇丁オ）。
- 17 『山形日記』（『青森縣史』二巻、山形県、一九七一年、四二四頁）。
- 18 串原正峯『夷言俗話』（谷川健一編『日本庶民生活資料集成』四巻、三一書房、一九六九年、五一～一頁）。
- 19 青森県立郷土館調査報告『字鉄の民俗』（一九八七年）、九八頁。
- 20 前掲注（19）、九八～九九頁。
- 21 氏家等『移住とフォークロア北海道の生活文化研究』（北海道出版企画センター、二〇〇七年、一六二～一六七頁）。
- 22 「宇壽場所様子大概書」（『新北海道史』七巻史料一、北海道、一九六九年、五二五頁）。
- 23 松田傳十郎『北夷談』（谷川健一編『日本庶民史料集成四巻』三一書房、一九六九年、九八頁）。
- 24 五来重『円空と木喰』（淡交社、一九九七年、六九頁）。
- 25 坂倉源次郎『北海随筆』（谷川健一編『日本庶民史料集成四巻』三一書房、一九六九年、四〇八頁）。
- 26 前掲注（18）、五一～一頁。
- 27 前掲注（18）、五一～五二頁。
- 28 新井田孫三郎『寛政蝦夷亂取調日記』の寛政元年（一七八九）六月一日～九月二三日条には、伝七と吉兵衛の口上が記されている。（『日本庶民生活史料集成四巻』三、三一書房、一九六九年、六六七～七〇〇頁）。
- 29 平秩東作『東遊記』（谷川健一編『日本庶民史料集成四巻』三一書房、四二六頁、一九六九年）。
- 30 前掲注（1）、筆者翻刻。
- 31 『新羅之記録』下巻（『新北海道史』第七巻史料一、北海道、一九六九

年、五二頁。

32 佐伯有清『円仁』（吉川弘文館、二〇〇八年、二六三～二九二頁）。

33 宮崎ふみ子、ダンカン・ウィリアムズ「地域からみた恐山」（『歴史評論』六二九、二〇〇二年九月）。

34 宮崎ふみ子「恐山信仰の伝播についての一考察」（『地方史研究』三〇四、二〇〇三年八月）。